「創生」するために

紅露　一寛

新潟大学に10番目の学部として「創生学部」が平成29年4月に設置されて，この4月で2年が経過した。創生学部には，様々な専門分野をルーツに持つ教員が集まっている。人文科学，社会科学，法学，経済学，教育学, 理学, 工学, 農学などなど。かくいう私の専門は, 工学（engineering）の中の, 土木工学（civil engineering）である。もっと細かく言うと，応用力学（おうようりきがく，applied mechanics）とか計算力学（けいさんりきがく，computational mechanics）が私の専門である。

皆さんもご存知の通り，土木工学は，道路や橋，トンネル，堤防やダム，港や空港，上下水道など計画，設計し，それらを作り，長く使い続けるための維持管理を行う技術に関する学問分野である。現代の安全・快適で健康的な暮らしは土木工学なしでは考えられず，防災や交通に関する仕事の中には 24 時間体制のものも少なくない。時の流れとともに「縁の下の力持ち」として存在を認識されることも多くなってきて，若者には「地味」に映ることも多いようである。そんな「土木」に関わる「土木人」にとって，普遍的な価値観と呼べるものの一つが,「広く社会を見渡し，公共の福祉を追求すること」だと思う。私たちが暮らす社会には，様々な地域に様々な人々が暮らし，その一人一人が同じく安全・快適で健康的な暮らしを実現するために,「土木人」は自然環境や文化，歴史や風土を理解・尊重した上で，社会のありようやその変化にも目を向けつつ，私たちが手にしている高度な技術を駆使していく。そのプロセスでは，世の中の多様な意見に耳を傾け，個人を尊重し，時に人類以外の生命にも配慮しつつ，広く社会全体の共通の利益を追求していく。数多くの「土木人」がその仕事を通して得た喜びの多くは,「一人一人の笑顔や感謝」であり,「土木技術を通して地域や社会への貢献が実感できたこと」である。そんな「あるべき姿」を実現するためには，もはや狭い意味での「土木工学」を学んだだけでは十分とは言えないことは，誰の目にも明らかであろう。そんな「土木の視点」から創生学部の教育を考えると，それは私たちの社会そのものを日々学べる貴重な存在であり，高等教育機関として先端的な存在といえよう。

ここまで言葉を繋いできて，改めて「創生」の意味について考えてみたくなった。わが書架の国語辞典で調べてみると,「創生とはー初めて生み出すこと．初めて作ること.」とある。この「創生」の意味をかみしめたとき，創生学部で学んだ若者には，地方とか世界とかを意識せずに，私たちが生きるこの世の中で解決が求められている課題を見つけ, 創造的に課題を探求し解決できる人材になってほしいと思う。その対象は，今流行りの「地方創生」でも良いし，環境やエネルギーなどのグローバルな問題でも良い。社会との関わりのある課題に取り組むことを通して,「対象とするモノやコトのあるべき姿」を探求することや,「あるべき姿」を具現化するための歩みを止めない姿勢を身に付けてほしいと思う。そして，一人一人の「人生の歩み」が，名実ともに「創生，はじめて生み出す」ことで多様性を尊重し寛容な社会を作り上げることに貢献してほしい，と切に望むところである。また，教育を担当する私たち自身も，教育や研究の世界で真の意味での「創生」を実現したいものである。